

# A c a n t h u s

第37号

平成23年7月5日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

旧本館は、ふだんは、吹奏楽・弦楽部の活動の場として利用されているが、現役生の多くは、公開日となる‘特別なとき’しか訪れる機会がないのかもしれない。過日、はじめて足を踏み入れたと思われる生徒が最初に口にしたのは「すごい！天井が高い！」という興奮した驚きだった。その‘第一印象’は、多くの同窓会員にとっても、きっと共有されているものだと思う。今号も、この明治期を代表する国指定重要文化財の誕生にまつわる話題を取り上げたい。



日本館西側に咲き誇るアカンサス（6月28日撮影）

## アカンサス意匠は雲崗・敦煌にも

昨年度は二千五百人近くの方にお越しいただいた旧本館。多くの来訪者は、正面に立たれると、ゴシック調の外観と左右の教会をイメージさせる尖塔に見入られる。玄関口まで進むと、三連アーチとコリント様式の柱頭装飾、扉・天井に施された上品な意匠に息をのむ。館内では、明治期の文化の香り漂う木造洋風建築ならではの重厚で荘厳な趣と、凛とした崇高なる学びの威容を全身に感受しながら細部までこだわった多種多彩な美しい・趣向により醸し出される神韻なる美の空間を満喫される。それらはアカンサスの花と葉をモチーフにした模様で、乱暴に言えば、その妙が旧本館の真骨頂であり、醍醐味なのかもしれない。それは、古代ギリシア以来、古代ローマ・中世・現在に至るまで、建築物や内装などの装飾のモチーフとして使用されてきた。特にギリシア建築の円柱の一種「コリント式オーダー」は、これを意匠化した柱頭を特色としている。また専門家によれば、その文様は、ヘレニズム時代に東漸し、ガンダーラ美術や雲崗石窟・敦煌莫高窟等の仏像・石仏にも見られるのだという。アカンサスについては、小紙4号で詳述したが、純白の花が今、6〜7月を盛りんに旧本館西側花壇で咲き誇っている。深い切れ込みがある大きな葉は、夏の陽光に眩しく映えて根際から四方に伸び、とがった苞葉と筒状の花びらは、穂状にやや垂れさがって見える。実に優雅で愛くるしい。常緑多年草で乾燥・日陰・寒気にも強いという。ギリシアの国花で、花言葉は芸術・技巧・巧みさだと聞く。

## 佐世保時代の駒杵勤治

旧本館を設計した駒杵勤治は、アカンサスの装飾・意匠を随所に配した。竣工して間もない写真には、正面玄関屋根及び左右両翼の切妻破風の頂点にも、見事なアカンサスの四弁の花が雄大に咲き誇っていた。正面から仰ぎ見た三基のアカンサスの花の揃い踏みは、圧巻の極みだったとも想像される（現在は代わりに正面玄関上にだけ四角錐の飾りがある）。

それほどまでにデザイン化されたアカンサスの装飾を追求し、考究した「建築家・駒杵」について、今号はその佐世保時代を中心に述べてみたい。

平成20年10月20日、佐世保市から鶴田清人氏が、本校旧本館の視察に来られた。地元では「佐世保ば語ろう会」の郷土史家として活躍されている先生は、『佐世保市史』や関与された母校の旧制長崎県立佐世保中学校創立百周年記念誌『草木ヶ原』から漏れた、明治41年創立の母校校舎の設計者「駒杵勤治」に関する茨城での業績を調査する目的のためであった。旧本館の外観はもろろん資料室や復元教室を丹念に閲覧され、駒杵の足跡を感慨深げに究明・考証された。翌日は、同じく「駒杵ゆかり」の太田一高・水戸商業高も訪問されたそうだ。

この調査をもとに、平成23年3月、「させば外史『佐世保近代化建築の源流を訪ねて』」を刊行された。ちなみに同書の扉を飾るグラビアの第1ページは、駒杵設計による本校の旧本館玄関であった。

今般、鶴田氏のご好意により同書の寄贈を受けた。私どもにとっても、茨城を去った以降の「駒杵勤治」をたどる上で

懇望していた貴重な資料であり、同氏の研究成果には深く敬意を払うものである。それによれば、駒杵は、明治38年に茨城県技師の職を解かれ、内務省技師に転じた。そこに至るには、同郷で大学の先輩でもある造神宮技師の伊東忠太と共に伊勢神宮司庁舎（現神宮道場・明治36年竣工）の設計に携わっていた来歴と密接に結びついていたことが推測される。



駒杵勤治・伊東忠太が設計した伊勢神宮司庁舎（現神宮道場）

さらにその2年後の明治40年2月に、今度は海軍省技師として佐世保海軍鎮守府経理部建築科に赴任した。その後10年間（建築家として実働17年）、佐世保鎮守府廳舎などの海軍関係の建築を手がける中で、佐世保市内の公共建築物の設計にも辣腕を振るったのである。その代表的なものが、佐世保中学校校舎と初代佐世保市庁舎であった。およそ市の人口が、明治25年には1万人、明治35年には5万人、明治43年には8万2千人と急増し、市全体が活況を呈していた。そこにモダンな建物の出現は、さらなる発展の象徴として、大きな話題をふりまいたことだろう。これについて『させば外史』では、「…駒杵勤治設計の『佐世保市』の本格的な初代庁舎が落成開庁します。建築家として実に精力的な活躍ぶりです。当時の市

民生活の中において、一時、大輪の花が咲いたよつな出来事であったと思います。先に触れました『佐世保村』が一転して大都市に変貌する…と一市民の抱いた心情を素直に叙しつつ、駒杵を称え、市の躍進ぶりをつづっている。なお、庁舎の工事総額は2万1千余円であったとされる。わが旧本館が6年前で約6万円だったことから、様々なことが考えられる。



『させば外史』表紙

### 駒杵勤治の設計理念

次に、駒杵の設計理念はいかにあったのかを考えてみたい。本校旧本館をはじめ、その手腕が発揮された作品群を見れば、ある程度は理解できると言えなくもないが、彼は、佐世保に赴任する前の明治39年に、『和洋住宅建築学』を刊行し、自らの設計理念を吐露している。そこには、彼の建築哲学が端的に語られている。例えば、その「第四章 設計の注意 Care of Design」では、

設計に就て最も注意すべき事項を列記すれば左の如し

- 一、外観の美
- 二、各室に便利を與ふること
- 三、廣潤にして窮屈ならぬこと
- 四、無益なる場所を設けざること
- 五、適當なる日光の射入及新鮮なる空氣の流通を計ること

### 外観の美 住宅外観の美は建築家の高尚なる美的思想と大なる熟練とに依りて達し得べきものなり能く成功したるものは左の數項を具備するものとす

A、式の一致して混用なきもの

式の一致して混用せざるは尤も其外観の品位を保つに必要なり例へば外部にはゴシック式を用ひ内部の裝飾器具等には他の式を用ひるが如きは断じて不可なりとす此目的を達せんとするには建築の歴史を精讀して各時代の諸式を講究せざるべからず

B、均衡を保持して中心線の両翼輕重なきもの又は中心線兩翼相等しきもの

C、中央に重きを置きたるもの

住宅の正面中央部(多くは入り口付近)を他の部分より豊富に裝飾するは美的なり人は先ず目を建物の中央に注ぎ次で他方に目を休むるものにして双方の對照上初めて美的觀念を起すものなり…

D、不安定の念を引き起さすべき構造を用ひざるもの (後略)

(以上『させば外史』より転載) いずれにしても、駒杵の建築に関する考え方が直接的に表現されたものである。それが、寸分違わず反映されている作品として、わが旧本館は白眉に値すると言えるだろう。



『させば外史』グラビアの最初を飾った旧本館

また、明治43年に上梓された小野武雄著『建築設計図案』に寄せた序文には、「嘗て拙著和洋住宅建築學に於て論述したるが如く、當今我邦に於ける建築には、形態の不備と構造の脆弱なるものが甚だ多い。鎖國の時代ならいざ知らず、苟くも列國と肩を並べて、文化を競ひ明治の聖代に於て、物質的進歩を代表する所の建築が粗雑拙劣を極めると有つては、他國人に對しても耻かしい譯だ…」とある。

高い理念と強い責任感を横溢させ、新しい時代を切り拓いていく明治人の氣概が伝わってくる。同時に、建築全体の質的向上をめざすうえで、一般住宅への関心が強かったことも読み取れる。

### 駒杵の海軍における業績

駒杵の海軍における足跡については、軍機密扱いが多いためか、つまびらかにされていない。しばしば朝鮮半島や中国大陸に出張していたようであるが、わずかに朝鮮半島の永興(ヨンフン)にあった防衛隊司令部・防衛隊兵舎・防衛隊司令部病室が知られているに過ぎない。佐世保で明らかなのは海軍工廠のみ。佐世保鎮守府には、10年間も在籍していたので、常識的には、その作品は数多くあったはずである。これについては、軍機密の他に、昭和20年6月の空襲被害や終戦後の軍による焼却処分によつて、資料等が消失してしまったためと考えられる。また、佐世保時代の彼の住居についても不詳である。海軍時代の彼は、高等官5等待遇の奏任官の文官で海軍軍属ということであった(高等官は親任官・勅任官・奏任官の高級官僚。親任官は天皇による親任式をもつて叙任される内閣総理

大臣・各省大臣・陸海軍大將・樞密院議長・同副議長・樞密顧問官・内大臣・宮内大臣・特命全權大使・台湾總督・朝鮮總督・大審院長・検事總長・會計検査院長の最高の官吏。勅任官はそれに次ぎ、勅旨により任命される高級官吏。親任官以外の高等官9等中の1等・2等)。赴任当時は、軍人の階級で言えば少佐であり、30歳の駒杵夫妻にとつては恵まれた待遇の生活といえ、当然、高級将校に準じた官舎住まいであったに違いない。

それにしても、彼の大学時代の同期には名だたる逸材が揃っていた。後に東大教授にして、その耐震構造理論が世界に通じるレベルであることを実証せしめた佐野利器、早稲田大学建築学科の創設者で、幅広い作品を世に輩出した佐藤功一、現在の国会議事堂建設のチーフであった大熊喜邦、清水組の技師長を務めた田辺淳吉といった建築史学とその名を燦然と残す面々が、一同に机を並べていたのだ。

### 晩年の駒杵勤治

大正6年4月、その理由は判然としないうが、駒杵は海軍を辞し、福岡市に設計事務所を開設した。彼なりの建築家人生を貫き通す一大決意であっただろうが、志半ばにして、2年後の大正8年2月27日、結核でこの世を去つた。享年42歳。そしてその直前の2月15日には『福岡日日新聞』に「市区改正私見駒杵勤治」が掲載された。その趣旨は「都市の歴史的遺物保存と産業の最大能率と市民の最大利便の融合を顧慮せねばならぬ、その好例は沢山ある」と喝破したものだ。これこそ、90年以上前にあって、「現在」をも透徹し通観した卓見であろう！ (次号に続く)